



僕は発達凸凹の大学生
—「発達障害」を超えて—

山田隆一 著, 今村 明 協力
星和書店
2019年8月 208頁
本体価格 1,600円+税

本書は、著者である自閉スペクトラム症をもつ青年が大学生になるまでの自叙伝に主治医が協力者の立場で心理検査所見の解説を寄稿した二部構成となっている。

山田氏の自叙伝は冬の長崎市街地のバス停から書き起こされている。著者は自閉症スペクトラム症当事者として、自身が学生として在学中の長崎大学から依頼された教職員向けの講演に向かっているところで、その道すがら、講演の予行として、幼少期からの半生を振り返り、コーヒー中心の飲み物とともに、考えをまとめていくという小説の文体で書かれている。冒頭部分の、最初に進学した学校を中退し、通信制高校に進学、卒業した頃の記載で「(中略) いわゆる浪人生活を始めたことになる。それにしても、『浪人』という言葉は、もともと一部の武士を指した言葉であったため、響きが良い。ポジティブな印象を与える言葉なので、気に入っている。武士道精神で再び受験に臨むことを喚起させてくれるようである。過年度生に対してこのような言い回しを考案した人には、賛辞を送りたい」などと表現され、全体を通して、例えば話が独特で、かつ迷いのないポジティブ思考なのが興味深い。

著者が大学生になるまでの起伏に富んだ半生の述懐は、波瀾万丈のドラマを書こうとしているのではなく、教育関係者、生活・仕事のなかで自閉スペクトラム症にかかわるすべての人、そしてわれわれ精神医療従事者への啓発をめざしているように感じられた。自叙伝では、徹頭徹尾「僕」を主語にした書きぶり、発達特性が日常生活のなかに発現した時、それがよいほうに働くと(凸)、失敗や後悔につながるときは(凹)と表示され、自閉スペクトラム症当事者の特性ゆえに起こった他者との軋轢、失敗体験を当事者はこう捉えたということが、読者に明示されている。山田氏の場合、人の考えを感じ取ることが不得手で、会話の時

にひどく緊張してしまうことと、音や刺激への過敏さ、運動が苦手なことは仕事や生活の悩みになるが(凹)、反復とこだわりは、興味のある文をひたすら音読をするという独自の英語学習法などに活かし、そこから数カ国語を習得するに至った(凸)とセリフモニタリングが記されている。本書は発達症当事者に汎化したマニュアルをめざしておらず、状況別に有効な対処法について言及せず、一個人の経験という論点を貫いている。また、彼の周りとは何かが違う特性と行動ゆえに、学校生活で不快な思いをする場面も記載されているが、それよりも人から評価、応援、支持を受けたことを強調し、文字数を割いているところに、著者と協力者の意思があるように思われた。

書評子が精神神経学雑誌の書評欄にて本書を推薦する、1番の推しどころは、大学講堂で聴衆に向かって講演する、最終章の「当事者かく語りき」の場面である。著者から発達症当事者へ、当事者の周りのさまざまな人に向けた思いの丈と、お互いを尊重できる社会をめざしたいという願いの論説部分が秀逸で説得力がある。本書の帯に記されたように、同様の特性をもつ人と、発達症支援に迷走する人にとっての灯台の光になるようなメッセージである。

また、医療従事者の書評子にとっては、「私が特に彼について素晴らしいと思っていることは、少なくとも高校生以降の彼の決断は、ご家族や支援者に言われて行ったわけではなく、しっかりと自分の意志で行われていたことです」と、主治医であり協力者が総括している点は、同じ支援者として大いに頷ける点で、精神科医が当事者の「協力者」であり続けるための適度な距離感を提示する部分として注目された。解説と心理検査結果の説明は自伝部分のエピソードを当事者とは視点を少し変えて解説されており、巻末間際にもうひと押し、著者の周囲の人から、特に母親からの応援について記載が追記されている。

冬の日から始まった著者の人生の振り返りは、長崎の街の春の訪れが感じられたところで一旦筆が擱かれて、人生の次の段階に向かっていくことが示唆されている。生まれ故郷の長崎から、東京、イタリアを舞台にして、自分自身の人生の「主人公」としてブレずに生きてきたことを今風の小説口調で表現する青年と、彼に光をあてる支援者のあり方に、新しい世代の発達症当事者がめざすりカバーイーが感じられた一冊である。

(今村弥生)